

古語に

聞く

竹西寛子

講談社

古語に

聞く

竹西寛子

講談社

古語こごに聞きく

一九八一年五月二五日第一刷発行
一九八一年九月二九日第二刷発行

著者——竹西たけにしひろこ寛子

©Takenishi Hiroko 1981, Printed in Japan



発行者——三木 章

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京〇三九四一二三 振替東京一五〇

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——株式会社堅省堂

定価——一三〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えます。

目次

年もかへりぬ	8
山に入る	10
なからひ	12
面・頬	14
友待つ雪	16
ありしながら	18
面影に添ふ	20
影・あさまし	22
なくてぞ人の	24
心ながし	26
なほざり	28
気遠し	30
さだすぐ	32
はづかし(一)	34

はづかし(二)	36
しづごろ	38
桜狩	40
空	42
あはひ	44
世づく	46
顕証	48
黄葉	50
懸想	52
おほけなし	54
うき世	56
ものす	58
千代・八千代	60
まめ	62
うらなし	64
世界(一)	66
世界(二)	68

世界(三)	70
世界(四)	72
世界(五)	74
世界(六)	76
世界(七)	78
世界(八)	80
生きとし生けるもの	82
定めなし	84
いとほし	86
目やすし	88
宿世	90
われにもあらず	92
もののあなた(一)	94
もののあなた(二)	96
わざ	98
もののあはれ(一)	100
もののあはれ(二)	102

事 の 心 (三)	事 の 心 (二)	事 の 心 (一)	言 の 心 (二)	言 の 心 (一)	言と事と心	胸 つ ぶ る	心 も ち る	腹 154	つ れ づ れ と	わ り な し	あ い な し	な つ か し	そ ら ご と	も の 言 ふ ・ 語 ら ふ ・ 見 る	心 ひ と つ	心 な ら ひ
170	168	166	164	162	160	158	156		152	150	148	146	144		140	138

物の心(四)	196	物の心(三)	194	物の心(二)	192	物の心(一)	190	みちのく	188	あづま・えびす(三)	186	あづま・えびす(二)	184	あづま・えびす(一)	182	魂殿	180	おどろく	178	過ぐる齡	176	事の心(五)	174	事の心(四)	172
--------	-----	--------	-----	--------	-----	--------	-----	------	-----	------------	-----	------------	-----	------------	-----	----	-----	------	-----	------	-----	--------	-----	--------	-----

古語に聞く

年もかへりぬ

年のはじめにちなむ文章で、古い物語の中からすぐに思い浮かべるものに、「年もかへりぬ」がある。別に人をおどろかせるような文章ではない。しかし、年が明けた、新年になった、年が改まった、新春を迎えた、春になった、どう言い換えてみても追いつきようのない自然な決り方だと思う。書き出し、あるいは文段の改め方だと思う。

派手な文章もいい、際立つ言葉もいいが、飽きさせないというのは、やはり文章の大きな魅力のうちである。解りにくいので仕方なく読み返すうちに疲れてきて億劫になる。それでも改めての挑戦を促す文章もあるが、面白かった、でも一度でもうたくさんという場合もあるし、気がついてみたら幾度目だったろうということもある。

「年もかへりぬ。うららかなる空に、思ふことなき（源氏の）御有様はいとどめでたく」というのは、「源氏物語」の薄雲の巻の一節であり、「年もかへりぬ。朱雀院には、姫宮、六条院に移ろひたまはん御いそぎをしたまふ。」とあるのは若菜上巻である。古い歌では、「年かへる」「年たちかへる」の用法も珍しくない。

「かへる」は、「帰」「返」「還」いずれの字をあてても、巡還、反復、往還の意にかかわってくるが、「年もかへりぬ」となると、終りのない時にアクセントを打ちながら、区切れるものではないからさまたまの区切りをつけて生き、死んでゆく人間の姿を自然に思い返す。

愛すべき、恐るべき知恵のかたみとしての区切りが、また、限りあるただ一度の生と死が、そのまま終りのない時になるらしいということ、あるいは、そのことによってしか人は「永遠」には関われならしいということも考える。何気なく読み、聞いてきたが、地味でも動かしようのない言葉の配合の一例かと思う。

山に入る

春には花が咲き、冬には雪の降り積る「山」は、古くは比叡山延暦寺をいい、また御陵をさす語でもあった。御陵のかたちからいつて、決してふしぎではないが、一つの語が、仏にも、天皇ひいては神にも通じて用いられた、それも抽象的ではなく具体的に用いられたのは興味深いことである。

「山に入る」という。文字通り地表の現象の一つである山に人が入ってゆくのだが、出家して山に籠るという意味にも使われる。山を出る場合もある。しかし再び俗界には現れない人もあつて、その例は、光源氏に女の明石の上を奉った明石の入道である。

孫娘の明石の女御が東宮の男子を出産すると、この入道は、長年の祈願の甲斐あつたことを女に告げ、願ほどきを怠らないようにと言ひおいて山に入つてゆく。

わたしの命終る日を知ろうとなさるな。「この月の十四日になむ、草の庵まかり離れて深き山に入り侍りぬる。かひなき身をば、熊狼にも施し侍りなん。そこにはなほ思ひしやうなる御世を待ち出でたまへ。明らかなる所にて、また対面はありなむ。」（若菜上）

三島由紀夫の「文章読本」から引用する。「日本の根生（ねおひ）の文学は、抽象概念の欠如からはじまつたと言つていいのであります。」「日本語独特の抽象概念にあたるものは、いつも情緒の霧にまとひつかれ、感性の湿度に浸潤されて、決して抽象概念すら自立性、独立性、明晰性を持つことはできませんでした。」

私は、このような日本人の日本人なりの工夫のこらし方、知恵の傾け方の一例を「山に入る」に見る。観念語や抽象語を手に入れた日本人が、一つ語の、他の語との関係による多面的な運用から遠ざかったということの得失は小さくないが、「具体」のないところには「抽象」もないはずである。「山に登る」ではなく、「山に入る」という言い方をいいと思う。

なからひ

謡曲「野宮」を生んだ「源氏物語」賢木の巻は、高貴な男女の秋の嵯峨野の別れが身にしみる帖で、須磨の巻などよりもかえって味わいは深いのではないかと思っている。

ここでは、じつさいに筆を当てて書かれていること以上に、書かれてはいないけれど、読者がひとりでに想像力を行使させられてしまう空白の力が大きい。

源氏の心離れに耐えかね、娘の斎宮に従って伊勢に下る決心をした前の東宮妃六条の御息所なのに、相手の誇りのためには、多少の無理もいとわず言葉をつくして慰留する源氏と向い合えば、折角の決心も動揺する。それでも、さすがに感性に劣らず理性の強い御息所は、初志をまげないで京を離れるのであるが、その嵯峨野の一夜を描く一節にこういうところがある。

「思ほし残すことなき御なからひに、聞えかはしたまふことも、まねびやらむ万なし。やう／＼明けゆく空の気色、ことさらに作り出でたらむやうなり。」

「なからひ」の王朝での用いられ方は、この場合のように特定の男女の仲をさすばかりでなく、複数の人々の間柄をさしたり、血縁の意味に使われたりいろいろであるが、岩波版「古語辞典」によると、「平安女流文学でも源氏物語がほとんどすべての用例をもつ」語だという。

それにしても「なからひ」という言い方はいいと思う。「仲」でもなく、「間」でも「間柄」でもなく、ましてや「つながり」「関係」などではない。やさしく、むつかしく、あやにくな男と女の間柄をいうのに、遠まわしというほどではないが、あからさまでない言い方、薄物にくるんだような余韻を、語感そのものがすでにあらわしている。「腹」や「面」とは対照的だが、こういう異質の語の巧みな配合も見落せないのが王朝の文章であらう。

面・頬

今の世の感覚で、ただただ上品な、露骨なもの言いなど決してしないのが王朝の女房文学かというところではなくて、「腹」とか「面」「頬」のような語もけっこうあちこちに納まっているのだから、優美だ、典雅だといっても、その層の深さ、奥行きของ深さは、私などにはやはり容易には読みつくせない。

そのものずばりといった、直接の、即物的な語に出会ふと、時にはわが目を疑つて読み返すが、前後をよく読んでみれば、なるほどこういう語が交っているからこそ力ある優雅にもなるわけで、わずかの影を得てより強調される光や、一つまみの塩でいきる砂糖の味などを連想することにもなる。

「つら」という語は、少なくとも今日では上品な、しとやかな語としては使われていない。一般には俗語のように用いられている。「面の皮が厚い」にしても、